

## 保育者の絵本理解に関する一考察

——「老い」や「死」をテーマとして——

工藤真由美\*

A Study on the Nursery and Kindergarten Teachers' Ability for Understanding a Picture Book  
- 'Growing Old' and 'Death' as a Theme -

Mayumi Kudo

本稿は保育者（養成課程在籍学生も含めて）が、いのちの大切さを子どもに教える手段として、「老い」や「死」をテーマにした絵本を子どもに読むときの、保育者自身の読解力の深さの必要性と重要性について明らかにしようとするものである。

そこで保育者に求められる能力は、絵本を読む技能という初歩的な問題を超越する能力であり、それは次の三点である。

- (1) 死に対する子どもの理解力の発達段階を知る能力
- (2) 絵本の内容が、子どもにどのように理解されるのかを予想する能力
- (3) 絵本の内容が、子どものみならず、保育者自身の生き方とどのようにかかわり影響をもつかを考察する能力

以上は保育者が絵本のストーリーと自己の人生の経験を照射し相互の深い考察のうちに意味づけを行う能力であり、そこから子どもにどのように絵本を読み聞かせ、どのように子どもに接していけばよいかを考える能力である。広くこれらは読解力と呼ぶべき能力である。

**Key words:** デス・エデュケーション, 絵本, 読解力, 発達段階

はじめに

2004年2月からから2005年2月にかけて「子どもにいのちの大切さ・死の問題を教えること」に関するアンケート調査を、保育者養成課程に在籍する学生を対象に行った<sup>1)</sup>。その中の自由記述欄に「毎日これだけ多くの人が殺されるニュースを見聞きしていると、正直言って人のいのちの重みがわからなくなってくる。」というコメントがあった。短大生にしてこのような感想である。まして幼い子どもがいのちの重さを感じる機会はどうあるだろうか。このような社会状況の中では、家庭で教えるだけでは事足りず、保育者が折りに触れていのちの大切さを体験させることを設定する必要がありますが増えてくるだろう。

しかし、本意識調査によると、保育者養成課程に在籍する学生自身は、いのちの問題について子ども

にどのように接し、教えればよいのかよくわからないという。自己の体験も乏しい。そこで、学生自身が扱いやすいものの一つとして絵本を取り上げ、それをもとにいのちの大切さを子どもたちに伝えようと考えている<sup>2)</sup>。

だが、絵本を漠然と読み聞かせるだけでいいというものではないだろう。闇雲に哀しい物語や「死ぬ」ということを取り上げた内容を一方的に話して終わりではいけない。いのちの大切さや死の問題を取り扱った物語をどのような点に留意しながら保育の中で取り上げていけばいいのか。その際まず何よりも保育者自身の作品の読み解き、作品分析が重要になってくるだろう。このような問題意識から、本稿では上記の点に焦点付け、保育者の作品理解について検討したい。

### (1) 今日の背景

子どもにいのちの問題、特に「死」について語ることをタブー視する傾向は根強い。なぜ悲劇はいけ

\* 四條畷学園短期大学 保育学科

ないのだろうか。悲しい物語はいけないのだろうか。感情情緒の育成という点からは、当然喜怒哀楽すべてを体験することが望ましく、喜怒哀楽の「哀」を避けて通るべきではないだろう。柳田邦男氏は「子どもはたとえ六歳であっても、人生で大事なことはしっかりと感じ理解する力をもっている。絵本という表現媒体は、そうした幼少期の秘められた感性と理解力を呼び起こす力をもっているのだ。おとなが子どもと真正面から向かい合い語りかけることの何と重要なことか。」<sup>3)</sup>と述べている。

また、「人は誰しも人生の中で、愛する家族の誰かや親友の死であったり、家族同様に暮らしてきたペットに死なれたり、あるいは失恋や進学の失敗など、さまざまな喪失体験をする。しかし、これまでは絵本というジャンルで、死別の悲しみをかかえてどう生きるかという重いテーマは、避けられる傾向にあった。

もちろん、まったくなかったわけではない。『スーホの白い馬』や『わすれられないおくりもの』のように、民話や昔ばなしや動物のおはなしの形で、死別の悲しみと残された者の心の中に生き続ける死者の心あるいは魂のことを語りかける絵本はいくつかあった。『わすれられないおくりもの』の主人公アナグマの、『死ぬことをおそれてはいません。死んでからだがなくなっても、心は残ることを、知っていたからです。』という、「死生観」に、テーマが象徴的に示されている。

ところが一九九〇年代後半あたりから、動物やペットのおはなしを借りての死別の受け止め方の絵本がおおくなったばかりか、より直截的におじいさん、おばあさんの死や父あるいは母の死、さらに子どもや友達の死と真正面から向き合う絵本が積極的に出版されるようになった。<sup>4)</sup>という。

更に柳田氏は、「こうした作品が次々に出版されるのは、やはり時代のニーズに沿うものだと言えるだろう。子どもは楽しく夢を膨らませて・・・というだけでは、今の時代は苛酷なこと、悲しいことが多すぎる。震災死、水害死、事故死、がんなどによる病死・・・。そうした辛く悲しい体験をどう受け止め、その後をどう生きるかは、おとなにとっても子どもにとっても重要な問題だ。阪神淡路大震災や大阪の池田小学校児童殺傷事件の後、カウンセラーが重要な役割を果たしたことは、ニュースの切実さを示している。子どもに死のことを話してもわからないからそっとしておいたほうがよいなどというのは、子どもが直面している問題の重要さに気づこうとしないおとなの勝手な考えであり想像力の欠如以外の何物でもない。子どもを失った親の会の人々や子ど

ものカウンセリングにあたっているカウンセラーなどの話をじっくりと聞けば、現実の厳しさが少しはわかるだろう。」と述べる<sup>5)</sup>。

ところが、このような状況の中で絵本をどのように取り扱うのか、その扱い方が問題なのである。ひたすら不安を煽ったり、悲しみのみを感じさせるだけではいけない。これらを扱うときの大人の構えこそが重要である。そのためには大人が作品を吟味し、深く読み込まなければならない。また、対象とする子どもがどこまでまたどのように死ということを感じているのかを、大人や保育者は認識していなければならない。

## (2) 子どもの発達段階——死についての理解を中心に

子どもの死に対する理解については、拙稿の中で、ダナ・カストロ氏の分析を紹介したため<sup>6)</sup>、ここでは詳細は割愛するが、要約すると以下のようである。

- 1) 3歳以前では死をはっきりと自覚することは無いが、大人との愛着や基本的信頼の形成が、長じて後、死を受け入れていく際の精神的な成熟と関係が深い。
- 2) 3歳から5歳になると、死は語彙に含まれる。しかし死を日常的に繰り返される出来事の一つ(取り返しのきくこと)と考え、大人の言葉通りに理解するので、安易な説明は避けるべきである。(永い眠りについた、旅行に行ったなど)
- 3) 5歳から10歳では、特に6歳ごろには死は取り消すことのできない普遍的なことという理解ができるようになってくる。

また、アルフォス・デーケン氏によると子どもに死について語るとき重要な点は、第一に、正直であること、第二にやさしくわかりやすいこと、第三に死への不安を和らげ安心感をもてるようにすることである<sup>7)</sup>。詳述は別稿に譲るが、このことは親のみならず保育者にも共通して重要であると言える。大人はいつでも子どもの疑問に答えられるように自分の姿勢を整えておく必要がある。「死を語ることはそのまま親が自分の生き方を語ることでもあるのだから。」<sup>8)</sup>である。

上述したことと、さらに前節(1)今日的背景で述べたこととを考え合わせると、現代の子どもたちにとって、「死」について学ぶことはもはや焦眉の課題であるということだ。いのちの大切さを子どもとともに考え共有することが重要であり、これらは、大人として保育者として共通認識とすることが重要

である。

### (3) 作品理解の実際

では次に具体的な作品を取り上げ、作品分析を試みてみたい。

#### 1) 絵本に見る「若い」—— 『きりかぶ』<sup>9)</sup>

『きりかぶ』は、年をとった木が切り取られ、きりかぶとなり、自分はもう何の役にも立たない存在だと思っていたが、自分にしかできないことを見つけ、自分の存在の意味を見出していく話である。

「木はみんなのやくにたっていました。」

「やがてとしをとると きられることになりました。」

「きはきょうから きりかぶになりました。もうはなをさかせることも、はっぱをつけることもできなくなりました。」

『すっかりやくたたずになってしまったなあ』

ここに描かれているのは、所有と、所有がひとつひとつ剥ぎ取られていく老いの姿である。人はこの世に生を受けから様々なものを獲得していく。言葉を獲得し考える力を得ていく。知識を増やし様々なことができるようになっていく。長じてからは、学歴を得、会社に入り肩書きを得ていく。結婚して配偶者を得、子どもを得て家族を増やしていく。子どもの成長とともに会社や社会での地位も手に入れていく。ところが子どもが成長し、一人前になり独立し家から巣立っていく。退職の日を迎え今までの地位、肩書きが、剥ぎ取られていく。体力の衰え、健康への不安。もし、人間の価値をこれらの物事を所有することのみ求めていたならば、老いの日々は、これらの所有が一つ一つ剥ぎ取られていく日々であり、老いは単なる喪失へと向かうだけの、悲しく無力で希望の無い暗い道を歩むようなものである。

絵本の中できりかぶが述べる「すっかりやくたたずになってしまったなあ」とは、所有に価値を置いた人生観である。多くの人間がこのような価値観で生活している<sup>10)</sup>。

「しょんぼりしていると うさぎのきょうだいが出てきました。『これちょうどいいね。』『うん ほんと ちょうどいい』 そしてきりかぶにいました。『すみません、あたまをかしてくれませんか?』 そういうと うさぎたちは、こまあそびをはじめま

した。それをみてこんどは こりすがやってきました。」

きりかぶはこりすたちのお茶会用のテーブルに、ネズミたちの縄跳びの遊びの場に、ハリネズミの休憩場所になっていく。

きりかぶの円熟した様子から、まわりに人が集う。そして彼らに安らぎや安心感を与え、道に迷ったときには、歩を休め考える時空間を与えられる存在になっている。

「ねずみのおばあさんがやってきて『まあなんて立派なきりかぶなんでしょう。あなたのようなかたをずっとさがしていました。』『わたしは花をさかせることもはっぱをつけることもできない ただのきりかぶですよ。』『だいじなまごむすめのちからになってくれませんか?きりかぶさんあなたにしかできないことなのです。』『わたしにしか できないことって なんだろう』

「きりかぶはねずみの結婚式のすてきなステージになりました。『すてきなステージで結婚式をするのがゆめだったの。』

『わたしはちっともやくたたずじゃない。これから はきりかぶとして みんなを喜ばせよう。』きりかぶはそう思うようになりました。」

ここには、「わたしにしかできないこと」ということ、そのことを果たすことで自己の存在意義を見出すということが描かれている。そしてその先には、たとえ何もできなくなったとしても、その存在が人々の心の支えになるという、存在自体の価値が気づかれていくべきである。このような読みが保育者自身の価値観の変化を促し、個人の思考の成熟につながっていけば、一回りも二回りも大きな人間として保育に携わり深みのある言葉がけが期待できるのではないだろうか。絵本がその役割を担う重要なツールとなるのである。

人生のなかで老いや死に伴う恐れ、拒絶、孤独という感情を抱きながら自らを取り巻く様々なものの中で生きながら、ささえられて生きることそしてさらには、次第に生きて在ること、存在そのものの価値に至ること、老いて死を迎えることに向かう自己意識を深めること、これらは究極の学習といえる。絵本への深い読解力は、このような自己の人生への深い省察と気づきと相通じるものでは

ないだろうか。

## 2) 動物を通してみる生と死(別) ——『はじめてのおわかれ』<sup>11)</sup>

『はじめてのおわかれ』は子どもがはじめて死というものに出会い、経験したことを、子どもらしい感性で描いた作品である。

まず、作品は一人称である「ぼく」の目を通して表現されている。ロンはぼくが家で飼っているうさぎである。

「ロンはちっちゃいけど ぼくのおにいちゃん ぼくより 3つもとしうえなんだ。」

小動物の寿命が人間より短いこと、ゆえに子どもがはじめて経験する死は小動物であることが多いことがここでも予見できる。

先述した学生を対象にしたアンケート調査によると、はじめて「死」というものに接した経験の中身を問うと、「ペットの死」の経験を上げた学生の割合は、45.1%で、身近な人の死に次いで多かった<sup>12)</sup>。

「ロンはかわいいよ。めが大きくてふわふわしてて、とつてもきもちがいいの」

ロンの様子が記されている。現在形で表現されているところに、ぼくのロンへの思い、ロンは今でもぼくのなかに深く生きていることが想像できる。

「ロンはぼくのだいいなミニカーにおしっこをひっかけたことがあった。ロンはおこったらすごい。うしろあしでじめんを ドンとける。」

ロンとの忘れられないエピソード。大事なミニカーにおしっこをかけたロンは、ミニカーよりもずっと大事な存在である。おこったら「すごい」という表現は、僕のなかに占めるロンの存在の大きさを物語っている。

「ロンはブロッコリーのはっばがだいすき。おうちをももごさせてたべるんだよ。ロンはかくれんぼのてんさい。くさのしげみからあらわれて、ぼくをびっくりさせるんだ。」

「すごい」「てんさい」という言葉にも、ぼくのなか

でのロンの存在の大きさが表現されている。

ところが、状況は一変する。

「ロンがたべないよ。みずものまないよ。おしっこもしないよ。ぼくがよんでも めをとじたままなんだよ。」

生きているという証がことごとく否定されていく。ぼくは今まで見たことのないロンの様子に直面する。

「いちどもなかなかあった ロンがなかった。さいごに『ぷー』といて、うごかなくなった。」

「うごかない」子どもが感じる死の様子が、そっくりそのままに表現されている。

「ロンきこえる?ロン、ぼくを みて。  
ロンだいすきな はっばだよ。  
ロンうしろあしで けてみてよ」

ぼくはロンに呼びかけ、はたらきかけるが、ロンは反応しない。

「ロンのからだ、つめたくなっちゃった。かたくなっちゃった。『ママ、ロンはこわれちゃったの?』」

「つめたい」「かたい」

死のようすがありありと表現されている。ぼくははじめて死に直面し、「こわれちゃったの?」と問いかける。先述したように子どもにとっては死という意味は実感を伴わず、おもちゃが壊れて動かない様子のほうが身近に感じられる。

「パパがしずかに こういった。  
『ロンは しんじやったんだよ』」

「しんじやった」

今日、死という言葉や、死の現実を隠蔽する傾向は強い。子どもがいない間に処理し、子どもの目に触れさせないなどがある。しかし子どもは子どもなりの方法で死を感じ、次第に整理し、心の中に定着させていく。ここでは大人の助言、大人がこの喪失の時を共有し寄り添うことが重要である。大人が子どもと死について語ることの重要性は、ダナ・カストロやアルフォス・デーケンも指摘するところであ

る。

「ロンもどってきて。きみにいいわすれたことがあるんだよ」

ぼくは夢を見る。夢の中でロンと再会し、話しかけていく。

「きみはぼくのくうきみたい。だっていなくなるといきがくるしくなるんだもの。きみといるだけでたのしくなるんだ。君といっしょなら、なんでもできそうなんだ。きみはぼくのいちぶぶん。いないと、ぼくじゃないみたい。きみがいなくなってから、わかったことばかりさ。」

失って初めて分かる大切な存在。

「ぼくをかわいがってくれて、ありがとう。」

「ロン ありがとう だいすきだよ」

ぼくは夢の中でロンに言いたいことを言い切れた。ロンは心の中で思い出の中に生きていることを僕は知ったのだ。

「めがさめたら ロンはきえていた。でも、ぼくはもうなかないよ。

きみにあいたくなったら、よぶからね」

「さよなら ロン またあおう」

この物語は子どもが感じる死の様相が随所で語られていく。そして、夢の中ではあるが、「別れ」を十分に言い切ることで心の整理をつけて思い出とともに前進する様子が描かれている。これらと同様の物語に『ずーっとずーっただいすきだよ』<sup>13)</sup>がある。死を隠蔽せず別れを十分にさせることが重要であることを教えている作品である。

### 3) 身近な人との生と死(別)——『だいじょうぶ だいじょうぶ』<sup>14)</sup>

『だいじょうぶ だいじょうぶ』は、おじいちゃんとおぼくのかげがえのない時間の流れ、人生を描いた作品である。そしていつかくるであろうその時間の途切れることの予感。そして思い出の中に形を変えていのちがつながっていくことが示唆された作品である。

「ぼくが いまよりずっとあかちゃんに ちかく、おじいちゃんがいまより ずっとげんきだったころ、ぼくと おじいちゃんは、まいにちのように、おさんぽを たのしんでいました。」「ぼくたちのおさんぽは、いえのちかくを のんびりと あるくだけのものでしたが、とおくのうみや やまを ぼうけんするようなたのしさに あふれていました。」

ここには自然にもそして人の世界のこまごまとしたものにも、おじいちゃんとともに接し、次第に大きくなっていくぼくの姿があった。

「そんなおじいちゃんと てを つないで とことこ あるいていると、ぼくの まわりは まほうにでも かかったみたいに どんどん ひろがっていくのでした。」

しかし、あたらしい発見や出会いはぼくにとって、生きることの厳しさとの出会いにもなった。友達との関係、怖い動物との遭遇、交通事故、病気、けが、勉強等等。

「なんだか、このまま おおきくなれそうにないと、おもえる ときも ありました。」

「だけど そのたびに、おじいちゃんが たすけてくれました。」

「おじいちゃんは、ぼくの てを にぎり、おまじないのように つぶやくのでした。」

『だいじょうぶ だいじょうぶ。』

だいじょうぶ

だいじょうぶ

そのことばには様々な意味がこめられていた。無理をしなくてもいいということ、いつか誰かと分かり合えるときがくるということ、自分の生きていく道は悪いことばかり、こわいことばかりではないということなど。

そのようにして、おじいちゃんに支えられてきてぼくは成長した。

そして……

「ぼくは ずいぶんおおきくなりました。おじいちゃんは、ずいぶん としを とりました。だから こんどはぼくの ばんです。」

「おじいちゃんの てを にぎり、なんどでも なんどでも くりかえします。」

『だいじょうぶ だいじょうぶ。』  
「だいじょうぶだよ、おじいちゃん。」

絵本の最後の頁には、この言葉とともに、病院のベッドに横たわるおじいちゃんの姿と、その横でじっと手を握る僕の姿が描かれている。

人が生まれ成長する過程、人は一人ではなく人から支えられて在ること、いのちには限りがあり辛い別れがあること、そして一つのいのちが終わりを告げてもそれは子や孫という形を変えて次の世代へと受け継がれていくこと、いのちの連続性。この作品にはそのようなことが凝縮されている。人は一人では生きていけない、生かされて在ることに思いをはせること、このような気づきへと導いてくれる存在への感謝。生きることは学ぶことであるという深い学習の機会に触れることが重要である。人が生きていく様々な経験のうちにこれらを自己の内に取り込んでいくことが大切であるが、「絵本」という媒体を通して、自己の経験を素通りするのではなく、自己の経験を再構成し自己の経験の意味づけを図ること、すなわち、自己の経験と絵本の中の世界とを二色の織り糸のように紡ぎながら、自己の生きる道を意味づけていくことが、真の読解力といえるのではないだろうか。

おわりに

以上のように子どもにいのちの大切さ・死の問題について教える場合、絵本を読み聞かせるという手段が考えられるが、闇雲に死や別れを扱った作品を読み聞かせるだけではよくない。保育場面でこれらを扱う場合、①対象となる子どもが死の問題をどのようにどれほど理解しているか（発達段階）、②子どもが死の問題に直面した場合どのような反応を示すかなど、大人（保育者）が深く理解すること、そして③絵本の中に描かれた世界がどのように子どもたちに影響を与え理解されるのか。これらを総合的に理解する能力が求められるだろう。そして何よりもまず④保育者自身の生き様の中で、その絵本がどのような位置を占めどのように影響を受けたか、どのようにその世界を自らの生の中に位置づけていくのが重要である。

近年保育者を目指す学生の読解力不足が、そして「死」などにまつわる経験不足があるが、それらを補うことが課題である。これらを通して保育者自身が成長することが指導への深み厚みを増すことにつながり、「いのちの大切さを感じることの希薄化」という連鎖を断ち切り、「いのちの大切さ」を世代から

次の世代へと伝えていく文化の伝承ということにつながっていくのである。近年大人の絵本の意義について語られることが多いのもその傾向の一つの現れであろう。絵本を巡る深い読解についてその重要性を認識することが求められる。

注

(1) 工藤真由美「子どもにいのちの大切さ・死の問題を教えることに関する一考察——保育者養成課程在籍学生の意識調査から見えてくること——」四條畷学園短期大学論集第38号 2005年5月 pp15-31

(2) 同上p18

(3) 柳田邦男『砂漠で見つけた一冊の絵本』岩波書店 2004年10月 P58

(4) 同上PP152-153

(5) 同上PP154-155

(6) 工藤真由美「子どもにいのちの大切さ・死の問題を教えるということ——ダナ・カストロをてがかりにして——」四條畷学園短期大学研究論集第37号 2004年5月 PP42-60

(7) アルフォス・デーケン『生と死の教育』岩波書店 2003年5月 PP112-113

(8) 同上P113

(9) なかやみわ『きりかぶ』偕成社 2003年10月

(10) 工藤真由美『人間の生涯と教育に関する一考察』関西教育学会紀要第21号1997年PP56-60

(11) 河原まり子『はじめてのおわかれ』偕成出版社 2003年5月

(12) 前掲(1)P19

(13) ハンス・ウィルヘルム作 久山太市訳『ザーっとずっとだいすきだよ』評論社2003年9月

(14) いとうひろし『だいじょうぶだいじょうぶ』講談社2005年2月

—2006.3.30 受稿, 2006.4.10 受理—

# **A Study on the Nursery and Kindergarten Teachers' Ability for Understanding a Picture Book**

**-'Growing Old' and 'Death' as a Theme-**

**Mayumi Kudo**

Shijonawate Gakuen Junior College

In this report, the necessity and importance of a high reading ability for nursery and kindergarten teachers themselves is clarified. The high reading ability is indispensable to read a picture book on a theme of growing old or death to children as a method to teach them the importance of life.

Therefore, the abilities requested for nursery and kindergarten teachers can be summarized into the following three points.

- 1) The ability to know how the children will understand death.
- 2) The ability to predict how the children will understand the contents of the picture book.
- 3) The ability to consider how the contents of the picture book are related to the nursery and kindergarten teachers' experiences and how will the contents affect the children.

These points are the abilities to think thoroughly and to mark out a meaning on the relationship between the story of the picture book and their own life, and they are also the abilities to think how to read a picture book to children and how to teach life to them. These abilities should be widely called as a reading ability.

Key words : Death Education, Developmental stage, Reading ability for a Picture Book